

異文化対照法としての重訳

Nguyen Thanh Tam

(神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程)

Indirect Translation (ITr.) which is considered as 'poor copy of a copy (translation itself)' seems to be the last choice of translators and readers. However, until present, translations which are indirectly translated from another language(s) apart from the language of source text have been carried out throughout the world. The fact that there exists almost negative criticism about ITr. also implies that ITr. has not been well-studied, including its essence, variations and advantages (if any). Hence, it leads to the need of reconsidering ITr. as a more general and specific nature of translating methods, and investigating more carefully into the topic. This paper, inspired by the idea of Kawada (2008)'s 'triangulation of cultures', will first attempt to classify ITr. from the intercultural perspective, then discuss the possibility of ITr. as a kind of tripartite comparison between the source text, the mediating text and the target text through examples of Japanese literary texts translated into Vietnamese.

1. はじめに

翻訳は原文の「劣った複製」だと言われることがあるが、その主張を突き詰めれば常に原文で読めるようにすべきだろう。しかし、それは単なる理想であって実現不可能であり、翻訳の存在そのものを否定することはできない。同様のことは、重訳すなわち媒介の翻訳を介した間接翻訳 (Indirect Translation or Relay) にも言える。重訳は、そうした翻訳の「さらに劣った複製」として、つまり直接翻訳より劣位のものと思なされることがあるが、重訳は直接翻訳が難しいときに行われてきたものであり、その意義と役割を否定することはできない。例えば、(Liu 1995) によると、20 世紀初頭に西洋の書籍の日本語訳を介した重訳は中国の近代化に重要な役割を演じたとし、St André (2009) は歴史上、西洋人は重訳を通して非西洋人についての情報を共用してきたと指摘する。また、1990 年代以前のベトナムにおける日本文学の翻訳を見てみると、その 9 割が英語やロシア語などを介した重訳であったことは歴史的事実であり、日本の文化や文学は、こうした重訳を通してベトナムに伝わったのである (Nguyen 2013)。そのため、重訳は否定的側面だけではなく、異文化を伝える上で有効な手段として、

Nguyen Thanh Tam, "Understanding Indirect/Relay translation : Its merits as a Intercultural comparison method," *Interpreting and Translation Studies*, No. 14, 2014. pages 157-169. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

より客観的に再評価することが必要ではないかと思われる。

そもそも重訳が直接翻訳と比べて誤訳が多いとか、質が落ちるとされるのは、どのような基準に基づく評価であろうか。重訳を評価するには、その重訳を翻訳底本と比較するだけでなく、原文と照合することも必要となるだろう。また、重訳の有り様は一つであるとは限らず、幾つもの種類／変形もあるため、それぞれの変形と原文あるいは最初の媒介翻訳との関係によって、文化の転移や価値の変化が違ってくると考えられる。重訳の優劣を再検討すると、新しい側面が見えてくる。

本研究では、まず、ベトナムにおける日本文学の重訳という具体的なケースで、重訳の変形を論述し、重訳の新しい分類を試みる。さらに、原文・媒介翻訳・重訳という三視点の関係に着目して、文化理解への有効性という観点から重訳の優劣を再検討する。ただし、文学作品の翻訳の場合、テキストの意味と形式の両者とも重視すべき重要な価値があると見なされるが、本研究では言語の形式面には触れないことにし、意味上の側面のみ注目する。さらに、意味的側面のうち、文化的な意味がどれほど正確に伝えられるのかという問題を中心に考察する。また、時代による訳出法の変化はこの段階では考慮に入れなかったとする。

2. 異文化理解の視点から見る翻訳・重訳

人間の言語は認知と繋がっているため、言語使用には文化理解が入っている。翻訳は起点言語 (Source Language: SL) の文化を解釈し、その内容を目標言語 (Target Language: TL) の文化で受け入れられる形を再現することと考えれば、翻訳は異文化理解の手段のひとつであると言える。言い換えると、翻訳する過程で、翻訳者はまず SL の文化的視点をとり、起点テキスト (Source Text: ST) の内容を理解し、また TL の文化的観点から目標テキスト (Target Text: TT) を作成するものである。この翻訳プロセスを通常「翻訳」の基本モデルとする。それを単純化して、図式化すると、以下の図1のようになるだろう。矢印は翻訳行為が行われることを表す。網掛けした円形は、TT 作成に直接関与する文化的視点を示すものとする。

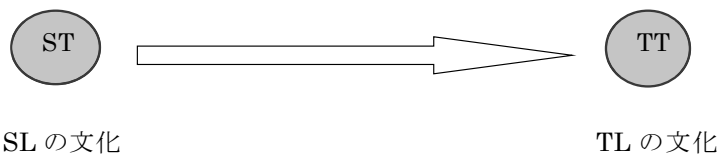


図1 STとTTの基本的関係：「二視点翻訳」としての通常翻訳

このモデルでは、本質的にはSTとTTという二者間の関係となる。また、このようなプロセスは直接翻訳であり、文化的な二視点に関連するため、「二視点翻訳」と呼んでいいだろう。

一方、重訳過程では、ST 以外に、媒介目標テキスト (Mediating Text: MT) での理解を参考にして、TT で受け入れられる形を再現するという作業が行われるものと見ることができる。この翻訳の特殊な種類としての重訳において、文化理解の視点はどのような形で現れるのかを次の節で論述する。

3. 重訳の変形

この節では、まず ST と TT のみある二視点翻訳のモデル (図 1 のモデル) を基にして、重訳の変形を検討し、文化視点からの重訳の分類法を提案することを試みる。また、それぞれの種類に該当するメリットとデメリットを説明する。

3.1 通常の重訳:「二視点の重訳」

重訳の一般的なイメージは一つの媒介言語の翻訳 (MT) から訳される TT のことであろう。MT の使用を図示すると、図 2 のようになる。図では ST と TT の間に矢印はなく、翻訳作業が行われず、直接の関係がないことを表している。網掛けの円形は、TT 作成、すなわち重訳作成に直接関与する参照点を表すものであり、ST は該当しない。

図 2 によると、ST から MT、MT から TT というそれぞれ独立した翻訳プロセスが行われる。それぞれのプロセスでは明らかに二つのテキスト、言語・文化しか関わらないため、それぞれが二視点の翻訳プロセスであると考えられる。このモデルは「二視点の重訳」と言えよう。

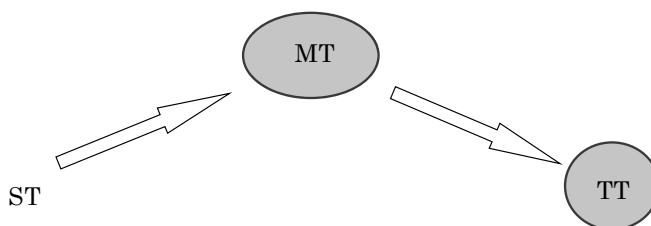


図 2 一般的な重訳:「二視点の重訳」

図 2 で見たように、ST と TT 間で直接の関係がないため、ST から MT の翻訳でどのような変化が起きたか、最終の TT では全く見えないことになる。言い換えると、ST と非常に薄く緩やかな関係しか持たないことは重訳の信頼度を低くさせる点でもあり、最も非難されているところではないかと思われる。それに加え、MT で確認できる誤訳や訳漏れはそのまま重訳に持ち込まれることにもなる。

この一般的な重訳のモデルから、MT の数及び原文 ST と関わる程度により、いくつかが異なる重訳の変形が次の通り確認できるだろう。

3.2 二つ以上の MT からの重訳：「三視点の重訳」

重訳には、二つ以上の媒介版を参照する場合もある。それは「三視点の重訳」と呼び、図3のように表示できる。

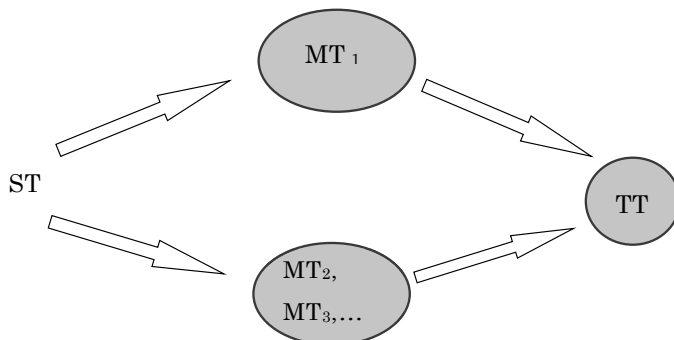


図3 二つ以上の媒介言語の翻訳：「三視点の重訳」

図3に示したモデルは、最終のTTが、MT₁とMT₂という二つの底本から訳されるケースである。もしMT₁で不明な点があれば、それをMT₂で確認できる。従って、翻訳者がより客観的に翻訳作業を行えることがこのモデルの利点だと考えられる。これは二視点の重訳のモデルより優越するだろう。ただし、複数の媒介版を使う場合は、例えばMT₁とMT₂で訳出法が異なっているときに、どちらに従って訳すべきかの判断に翻訳者は迷うことになるかもしれない。これはこのモデルの弱点であり、それはSTを参照しないことが原因だと考えられる。例えば、『眠れる美女』（川端康成）のベトナム語訳の *Người đẹp ngủ mê* (2010) は英語訳をメインの底本として使用すると共に、フランス語訳を参考にして訳したことを表紙に記述している。

また、この重訳の変形は、2つの底本の重視の仕方により、さらに細かいタイプ分けをすることもできるかもしれないが、ここではその区別はしない。底本の割合についての情報は、翻訳者のあとがきや表紙に明記されることもあるものの、はっきりしないことが多いためである。そのいずれもが翻訳されたテキストなのであってSTではないのだから、正確な情報を明記することがそもそも有益だと、出版社（または翻訳者）が判断しないことが多いようである。

3.3 STと対照した重訳：「三視点対照の重訳」

一般的な重訳が図2の形であるとすれば、それに加えてさらにSTを直接参照することができればSTとMTという二つの参照点からTTを作成することができる。つまり、三視点を対照することができるわけである。このような翻訳方法は、重訳と直接翻訳を結合させるタイプであるが、STの使用の程度によって、さらに2タイプに分けられると考えられる。

まず、STが参考程度に用いられるパターンである。このパターンは通常为重訳のモ

デル（図 2）を基にして、それに ST 参照を加えたものであるため、重訳の一種として「三視点对照の重訳」と名づけ、図 4 で表示する。この図では、直線は「参考にする」という関係を表すものとする。

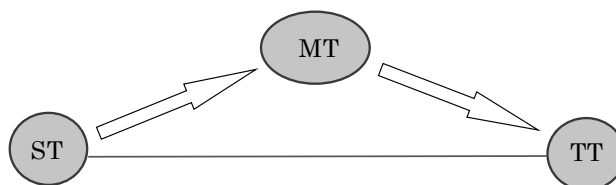


図 4 三視点对照の重訳

三視点对照の重訳は原文との直接の繋がりがあるため、翻訳の正確さはかなり期待できると考えられる。通常の一視点の重訳よりどのような優越点があるのかは、次節で具体的事例により検討する。なお、このパターン之眼目は、MT に ST の参照を加えることにあるため、MT が複数あるもの、つまり「三視点の重訳」（図 3）に ST 参照を加えたものも含むものとする。

実際には、このパターンは比較的数量が多い。ベトナムにおいて、三視点对照の重訳は、実はすでに 1970 年の『金閣寺』のベトナム語訳にも見られた。これは、英語ができる訳者と日本語ができる訳者のコンビによる、日本語 ST と英語訳という二つのテキストを使って翻訳された典型的な例である。そして、2002 年以降になって、こうした重訳の形式が多くなっている。例えば、日本の現代小説を訳したケースでは、『国境の南、太陽の西』のベトナム語版の *Phía Nam biên giới, phía Tây mặt trời* (2007) は、フランス語訳を主たる底本として、英語版と日本語 ST を参考にしながら訳された。『海辺のカフカ』のベトナム語版の *Kafka bên bờ biển* (2012) は、英語版とフランス語版を介して訳され、両者にズレのある箇所は ST を確認するという方式で行った。この二つの例では、ST の参照は訳者の日本語話者の知り合いによって行われたようである。

3.4 重訳を参照した直接翻訳：「三視点对照の翻訳」

重訳と直接翻訳を結合させる翻訳方法の二つ目として、ST を TT の主な底本とするものもあると考えられる。つまり、ST から直接翻訳する作業に、MT の参照を加えるという方法である。これには重訳の要素も含まれているため、「三視点对照の重訳」の変形とみなせる可能性があるが、「直接翻訳」に近いので、あえて重訳という語は避けて「三視点对照の翻訳」とする。これは、図 5 のように図示できよう。

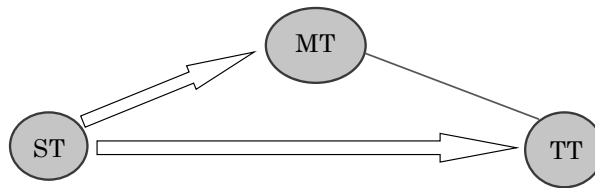


図5 三視点对照の翻訳

三視点对照の翻訳の例はそれほど多くはなく *Gói đầu lên cỏ* (2013) が夏目漱石の原文に基づいて、英語の *Kusamakura* (2008) を参考にして訳されたぐらいである。

この三視点对照の翻訳は、ST と MT の両者を用いている点で三視点对照の重訳と共通点があると考えられる。しかし、本研究の範囲では、直接翻訳に近い三視点对照の翻訳については紹介するに留め、三視点对照の重訳を中心に検討することとする。

4. 「三視点对照の重訳」のメリット

4.1 直接翻訳と通常重訳の問題点

すでに述べたように、通常翻訳の基本モデルは ST と TT に関わるものである。その翻訳、いわゆる直接翻訳の本質は SL の文化視点と TL の文化的視点をとり、二視点对照である。しかし、直接原文から訳したとは言え、完全に誤訳・訳漏れが排除できるわけではない。英語圏でかなり好評であった『ノルウェイの森』の英訳 (2000) でも塩濱 (2007a) が指摘しているように、ST からのズレが数多く含まれている。むしろ、完璧な翻訳はないと考えられる。したがって、間接的訳出法より直接翻訳が優越するものであって、最良の訳出法であるという見方には疑いが出てくるだろう。

こうしたズレを含んだ直接翻訳に基づいて訳される重訳は、問題が深刻である。英語訳を介した『ノルウェイの森』のベトナム語訳 (2006) は英語訳の欠点を受け継いだものとなっていて、例えば塩濱 (2007b: 293-296) は漢字の間違が原因と思われる誤訳として、ST の石田玲子という人物が MT (英語) で *Reiko Ishii* と訳されている点を指摘しているが、この英語版に基づいた TT (ベトナム語訳) でも *Reiko Ishii* となっている。

こうした問題は、重訳の翻訳者が媒介翻訳に完全に依存して、他の選択の余地がないことから生じるものである。誤訳・訳漏れ・省略を受動的に受け継がざるを得ず、問題が回避できない。通常重訳の例を一つ挙げておく。

ST: 「もちろん、時間さえかければ僕は彼女の顔を思い出すことができる。小さな冷たい手や、さらりとした手ざわりのまっすぐきれいな髪や、やわらかい丸い形の耳たぶやそのすぐ下にある小さなホクロや…」 (『ノルウェイの森』: 9-10)

MT: True, given time enough, I can remember her face. I start joining images - her tiny,

cold hand; her straight, black hair so smooth and cool to the touch; a soft, rounded earlobe and the microscopic mole just beneath it; (*Nowergian Wood* : 5)

TT(重訳): Nói thật là nếu có thời gian, tôi vẫn có thể nhớ lại gương mặt nàng. Tôi phải chấp nối các hình ảnh vào với nhau- bàn tay lạnh tí xíu của nàng; mái tóc đen và đuôi thẳng của nàng, sờ vào thật mịn và thật mát; một cái thùy châu tròn trịa mềm mại và một nốt ruồi bé tí tẹo ngay bên dưới... (*Rừng Na-uy*: 20) (直訳: 実は時間があれば、彼女の顔が思い出せる。私はイメージを連結しなければならない。彼女の冷たい小さい手。彼女の真っ黒いストレートの髪の毛。触るとさらさらすずしい。一つのやわらかい丸い形の耳たぶ、一つのホクロ)

下線を引いたところは、MT と TT で情報の補充が見られる項目である。ベトナム語は原則的には数、代名詞という文法的範疇を明らかにする必要があるが、実は英語やフランス語などの西洋言語ほど厳密な条件でもない。文脈によっては省略して意味が通じることもある。この箇所は日本語の原文そのままを補足なしにベトナム語に訳しても、読者の理解に支障はないと思われる。しかしベトナム語への重訳では、単数形の文法的明示化と補足説明の追加が盛り込まれた英語版の解釈と表現法がそのまま引き継がれた。また、英語訳で破線を引いたところは、ST にない追加の箇所であるが、それがそのままベトナム語にも持ち込まれている。英語版のみに依存したベトナム語版翻訳者には、想像力が英語版の解釈に限定されることになり、他の解釈の可能性が閉ざされる。こうした制限を越えるには、ST と対照することが重要な作業であると考えられる。

4.2 「三視点对照の重訳」のメリットの仮説

以上の実例から、次のようにまとめることができよう。

例えば日本文学のフランス語訳とベトナム語訳は、それぞれフランス人による日本文化の解釈、及びベトナム人による日本文化の解釈である。日仏から仏越へと重訳すれば、それぞれの翻訳は二視点翻訳である。その場合には原典に当たって誤訳を見つける作業は容易にはできない。しかし、日本語・フランス語ともに出来るベトナム人の翻訳者なら、日本語の原文とフランス語の翻訳からという2つの方向から、作品を見て、調整することができる。それ故、通常の1つの方向からの視点と比べると、TT では作品について理解を深めることが期待できるであろう。また、訳出表現の面でもかなり参考にすることができ、TT の多様な表現につながる可能性もあると考えられる。

同じように、複数の言語が出来る翻訳者であれば、ST を含む二つ以上の底本の表現と文化的視点を合わせて対比し、TT での表現と文化を整理することが実現できるようになる。つま

り、この場合、三視点の文化を対照した翻訳が成立し、前節で論述した「三視点対照の重訳」のモデルに当たる。

ここで、三つの視点を用いた比較研究法としての「文化の三角測量」(川田, 2008)という考え方を連想したい。

川田(2008)はある文化を判断するとき、別の視点として他の文化が、それも二つあれば、主観性をかなり補正できるとした。例えば「日本のことを考えるときには、フランスとアフリカを参照点にして考える...というふうはこの三地域の二つを参照点にして、他の一つを考えるということが習い性になりました。地測の三角測量もそうですが、二つの参照点から、他の一点を測る方が、他の一つを相対化、対象化しやすいわけです」と指摘している。また、この方法が、どんな異文化を研究するにも有効だと主張している(川田, 2008:18)。

従来、比較・対照は文化研究において、不可欠な方法である。川田の新しい発想は、二つの事物間の比較だけではなく、研究対象の事物と他の二つの参照点と合わせて三つの視点から成り立つ三角関係を強調した点が特徴的である。こうした文化研究に三つの視点を取り入れることの有効性は、三視点対照の重訳にも当てはまるのではないだろうか。

通常の翻訳・重訳に比べると、このタイプの重訳では ST と TT の間に、媒介訳が介在するため、通常翻訳の過程にもうひとつ別の「参照点」が加わることになる。つまり、ST の文化的な背景の視点以外に、ST についての MT の文化的要素が混じった視点を考慮しながら目標テキスト TT を作成することになる。従って「文化の三角測量」を重訳研究の場合に当てはめると、ターゲットである TT に、ST と MT という二つの参照点を合わせて「文化の三角関係」が成り立つ可能性があると考えられる。

この利点を重訳がもつとすれば、翻訳者は ST のみ、あるいは MT のみに頼るのではなく、複数のテキストを用いることによって、より客観的立場から、他の解釈を開く、創造的な TT を作ることが可能になるだろう。

他方、翻訳の実践の場からの声として、ベトナムの日本文学の研究者であるニャット・チュ Nhật Chiêu は、原作以外に媒介翻訳を利用することの有用性について以下のように述べている。

「他の翻訳が全く存在しない時は、最初から原文を直接訳さなければならないが、もし第3言語での翻訳版があれば、それを参照することで、よりよい直接翻訳が期待できる」(Nhật Chiêu、インタビュー)⁽¹⁾。

これは翻訳の過程で、対照・参照が非常に重要な作業だという主張である。Nhật Chiêu は自身が翻訳する際、日本語能力がない⁽²⁾ため、英語やフランス語の複数の媒介翻訳を用い、作品に関連のある情報を調べると共に、日本語の原作を参照した。この原作参照は、漢字の意味を確認し、できればベトナム語の漢語、いわゆる漢越語に訳すことに限定したものであった。さらに、ただ一つの訳ではなく、複数の底本を使用して訳すメリットについて Nhật Chiêu はインタビューにおいて以下の三点を挙げた。

第一に、他の言語の翻訳や ST を参照することが可能なら、前の翻訳者たちがどのように作品を理解し、優れた訳し方をしているかが分かる。どのように訳せるか、大

事なポイントが何かについて参考にできる。底本に曖昧なところがあったり、他の媒介翻訳とくい違ったりした場合は、STと照合して訳文を修正することができる。

第二に、文化対照ができれば、異文化理解の視点が深まると考えられる。例えば欧米人の日本文化に対する視点を参考にした上で、翻訳者独自の理解を加えて訳すことができる。

第三に、対照は差異を強調する効果がある。それ故、参考・参照の作業が行われた翻訳は間違いを最小限にする効果をもち、最も「良い」翻訳に繋がる。

また、『海辺のカフカ』のベトナム語版の *Kafka bên bờ biển* (2012) の訳者ズン・トゥン *Dương Tường* は「訳者の後書き」で、次のように述べている。

「個人の経験から言うと、(文学) 作品を重訳する時は、異なる二言語の訳版を基にして、意味不明の箇所は (ST を) 対照して参考にすべきだ。これは翻訳の誤りを抑える助けになる」(*Kafka bên bờ biển*, 2012:534)。

要するに、三視点对照の重訳のメリットは、理論的に説明できるだけでなく、実践の専門家にも公認され讃賞されている。

4.3 実例分析

以上の議論に基づき、「文化の三角測量」という異文化理解の利点が活かせる重訳として、三視点对照の重訳を、重訳の新たな可能性を開くモデルとして提案したい。また、三視点对照の重訳は通常翻訳と一般的な重訳、すなわち二視点の翻訳と二視点の重訳に比べて、どのように優勢であるかを示すために、二つの実例を見てみよう。

例①

『海辺のカフカ』のベトナム語版の *Kafka bên bờ biển* (2012) は、まず英語訳に基づいて訳され、その後フランス語訳を参考にしてチェックされた。さらにこの二つの底本で異なった箇所については ST を参照したものであり、つまり「三視点对照の重訳」である。*Dương Tường* は翻訳の過程において、英語訳とフランス語訳の間でくい違いがあるとき、ST と対照して解決したが、それを 15 箇所の注で説明している。ここではそのうち次の二つの例を紹介しておく。

Dương Tường は作品に出てくるクラシック音楽のタイトルを訳す過程について、「ここで、Philip Gabriel の英語版では “*Xô nát cung Rê trưởng* (二長調のソナタ)” とされ、Corinne Atlan のフランス語版では “*Xô nát cung Fa thứ* (へ短調のソナタ)” と訳された。我々は (友人の) スズキコトナさんにチェックを頼み、それで英語版が正しかったことが確認できた」と述べている (*Kafka bên bờ biển*, 2012:535)。つまり、ST を確認することでベトナム語訳では最終的に英語版の情報を採用する決定をして、「二長調のソナタ」に対応する “*xô-nát cung Rê trưởng*” と訳されたのである。念のため、ST と TT を挙げておく。

ST: 「フランツ・シューベルトのピアノ・ソナタを完璧に演奏することは、世界で一番むずかしい作業のひとつだからさ。とくにこのニ長調のソナタはそうだ。」(『海辺のカフカ』上: 190, 下線部は筆者によって強調)

TT: “Bởi vì chơi những xô-nát cho piano của Schubert cho hay là một trong những điều khó nhất trên đời. Đặc biệt là bài này, bài xô-nát cung Rê trưởng” (Kafka bên bờ biển: 2012, 128)

また、英語版で「You're a regular Linus」と訳された所はフランス語版では「Comme Charlie Brown, dans la bande dessinée, qui emporte partout sa couverture?」となっていて、ズレが見られる。日本語 ST を参照して確認すると、英語版のメタファーは表現が短く、変更されていることが明らかになった。ST では「それじゃまるで、チャーリー・ブラウンの漫画に出てくる男の子が肌身はなさず持っている毛布みたいじゃないか」(『海辺のカフカ』下: 152) である。英語圏で有名な漫画の『ピーナッツ』の中で、Linus といえば、主人公のチャーリー・ブラウンの友だちであり、肌身はなさず毛布を持っている男の子のことが連想できるのである。従って、英語版も ST と意味内容は同じである。ただし、フランスやベトナムでは、Linus という隠喩がそれほど一般的に定着していないと考えられる。ベトナム語訳では、結局 ST とフランス語版での「チャーリー・ブラウン」という固有名詞を含む表現を採用した。

TT: “Giống như nhân vật trong truyện tranh Charlie Brown đi đâu cũng mang chăn riêng theo (đó đi đâu đi đâu cũng mang chăn riêng theo (どこに行っても毛布を持ってチャーリー・ブラウンの漫画に出てくる人物のように)?” (Kafka bên bờ biển: 359)

また、こうした例から、参照点として複数の翻訳がある際に、重訳の訳者には先行の訳者の誤訳/変更に対して、どちらの表現を採用するかに関して、より自由で積極的な選択肢が可能になると考えられる。これは TL の文化背景で最も受容されやすく相応しい訳法が採択されることとつながるだろう。

例②

一方、タイ・バ・タン Thái Bá Tân と Nhật Chiêu の俳句の翻訳を例にしよう。Thái Bá Tân は英語訳の底本のみから訳した。Nhật Chiêu も英語訳を底本にして訳したが、それに俳句についての英語・フランス語の研究書を読んだ上、また ST の漢字の単語を調べて参考にした。

千代女の俳句「朝顔に つるべとられて もらい水」の二人の訳はそれぞれ以下の通りである。

Thái Bá Tân (2013: 470) では、“Từ rạng sáng/ Tôi cầm chiếc xô như cầm con tin/ Xin nước (早朝から/人質を持つように(?) 釣瓶を持つ/水をもらい)”と訳された。まず、「朝顔」は「早朝」と誤解されてしまった。これは、確かに英語訳の「Morning glory! / The well bucket-entangled, / I ask for water.」から、訳者は「Morning glory」という花

の名前が理解できずに、時間の表現だと判断していた。

そして、2 つめの文章に「人質を持つように」という解釈を追加訳したが、この俳句の内容とは全く違う方向になったと言えるだろう。

Nhật Chiêu (1995:18) の訳“A hoa triêu nhan / Chiếc gầu vương hoa bên giếng / Đành xin nước nhà bên (朝顔/釣瓶は井戸の花と絡んで/近所から水をもらい)”では、「朝顔」はきちんと「hoa triêu nhan」(朝顔の花)と認識して訳された。これは複数の底本 (MT と ST) の使用、及び文化的な参考資料を調べた過程の結果であるに違いない。

Thái Bá Tân (2013) では、他にも文化視点を誤解した誤訳がいくつもある。その原因は英語の語彙力のみならず、日本の文化・文学伝統の知識が欠けているにもかかわらず、先行する翻訳を参照しなかったためと考えられる。

5. 終わりに

以上、重訳の分類法を整理して提案し、異文化理解という観点から重訳の利点について実例を用いて検討してきた。結論として次の三点に纏めておきたい。

第一に、翻訳の特殊な種類である重訳は異文化理解の一手段として認めることができる。TL の文化と参照点の関係に基づき重訳の分類を検討したところ、二視点の重訳、三視点の重訳及び三視点对照の重訳という三つの変形が確認できた。また、直接翻訳と通常重訳の隣接形式として三視点对照の翻訳も発見できたが、詳細な検討は今後の課題とする。

第二に、異文化を解釈して表現する時の誤解や訳漏れ・誤訳を改善するには、三視点对照の重訳という種類がひとつの有用なモデルとして推奨できるのではないかという点である。実例分析で検証することにより、三視点对照の重訳では ST と媒介翻訳という二つの参照点があるため、最終的な重訳の質がかなり補正できることが分かり、他の種類の重訳より優越することが示された。

第三に、誤訳・訳漏れといった問題は直接翻訳にも発生する可能性があり、必ずしも重訳に本質的な欠点というわけではない。むしろ、時代的な制約等で避けられないものもあり、そう認識した場合、重訳の「罪」という偏見が解ける可能性がある。そして、三視点对照の重訳は、川田の「文化の三角測量」と類似した現象でもあり、こうした誤訳を含む解釈の限定といった問題を解消することができるため、通常の直接翻訳より優越する可能性も示唆できる。

ただし、三視点对照の重訳を実現する際に、媒介テキストが多ければ多いほど良いというわけではない。三視点对照の重訳の効果を明確化するのに、出版の方針や翻訳者の選択など関連する要素をよく検討しなければならない。特に、どの媒介翻訳を使い、どの国の文化視点を対照すればよいのかという問題は出てくるだろう。確かに、関係が近く、類似する文化、例えば漢字文化圏に属する国なら、参考にするのに有効であるとする見方もある一方で、文化を観察するには類似点はもちろん、相違点が分かれば、比較の視点を広げられる利点があるとの見方もある。川田は「これまでよく

おこなわれてきた東西文化の比較のように、二つのものの対比ではなくて、今の地球の時代に、東西に南の視点も加えた、三つの文化相互の比較によって、ヒトの文化を全体として、しかも主観による偏りを補正しながら、考えて行きたいと思うようになりました」(川田, 2008: 18)と提唱した。確かに、日本語、フランス語とベトナム語の間には、言語的差異が多いにもかかわらず、地理的文化的観点から見ると、類似し互いに補充できるものが全くないとは言えないだろう。それに加えて、日本は「東」、フランスは「西」でベトナムは「南」である。このような広い文化的視点に立つと、多様性に対するより深い理解が可能になると期待できるだろう。こうした視点間の類似・相違関係の影響については、今後の課題としたい。

さらに、文学は言葉の芸術であるため、訳者も文学的能力、すなわち TT での表現力を持たなければならない。従って、文学作品の重訳の分析においても、そうした翻訳者個人の文学的素養といった観点も入れて、検討すべきだということも重要である。

.....

【著者紹介】

NGUYEN Thanh Tam (グエン・タン・タム) 神戸大学大学院国際文化学研究所博士後期課程在学中。ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学日本学科専任講師。ベトナムにおける日本文学の翻訳と受容に関する研究に取り組んでいる。

.....

【註】

(1) 2014年1月5日、ホーチミン市、ベトナム、対面インタビュー。

(2) Nhật Chiêu はベトナム国家大学・人文社会科学大学において日本文学の教授であり、長年日本文学を研究している学者・評論家である。1980年代から英語、フランス語の研究書を介して、日本文学に興味を持ち、研究するようになった。

【引用作品】

Kawabata, Yasunari (2010). *Người đẹp ngủ mê* (『眠れる美女』), Quế Sơn 訳, 英語版
‘*House of the sleeping beauties and other stories*’(translated by Edward Seidensticker, Sphere Books Limited, London 1971) より+ フランス語版の ‘*Les belles endormies*’ (translated by R.Sieffert, Albin Michel, France 1970) 参照, Nxb. Thời Đại.

村上春樹 (2003) 『ノルウェイの森』 村上春樹全作品 1979~1989 講談社.

Murakami, Haruki (2000). *Norwegian Wood*, translated by Jay Rubin, Vintage.

Murakami, Haruki (2006). *Rừng Na-uy* (『ノルウェイの森』), Trịnh Lữ 訳, Nxb.Nhã Nam & Hội Nhà Văn.

Murakami, Haruki (2007). *Phía Nam biên giới, phía Tây mặt trời* (『国境の南、太陽の西』), Cao Việt Dũng 訳, Nxb.Hội Nhà Văn.

- 村上春樹 (2002) 『海辺のカフカ(上)』新潮社.
- Murakami, Haruki (2012). *Kafka bên bờ biển* (『海辺のカフカ』), Dương Tường 訳, 英語版の *Kafka on the Shore* (translated by Philip Gabriel, Vintage UK, 2005) より + フランス語版の *Kafka sur le rivage* (translated by Corinne Atlan, Belfond, 2005) 参照, Nxb.Nhã Nam & Văn Học.
- Natsume Soseki (2013). *Gối đầu lên cỏ* (『草枕』), Lam Anh 訳, 英語版の *Kusamakura* (translated by Meredith Mackinney, Penguin Classics, 2008), Nxb. Hội Nhà Văn.
- Thái Bá Tân 編訳(2013). *Thơ Haiku Nhật Bản* (日本の俳句), Nhà sách Đông Tây & NXB Lao Động.

【参考文献】

- 川田順造 (2008) 『文化の三角測量—川田順造講演集』人文書院.
- Liu, L. H. (1995). *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity: China, 1900-1937*, Standford, CA: Stanford University Press.
- Nguyen Thanh Tam (2013). 「ベトナムにおける日本文学の重訳-歴史的背景と異文化要素の翻訳-」 『通訳翻訳研究』 第 13 号:79-95. 日本通訳翻訳学会
- Nhật Chiêu (1995). *Nhật Bản trong chiếc gương soi* (鏡の中の日本), Nxb. Giáo dục.
- 塩濱久雄 (2007a) 『「ノルウェイの森」を英語で読む』若草書房.
- 塩濱久雄 (2007b) 『村上春樹はどう誤訳されているか—村上春樹を英語で読む』若草書房.
- St André, J. (2009). 'Relay', in Baker, M. and Saldanha, G. (Eds.) *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, London & New York: Routledge. pp. 230-232.

